

●対談●  
鈴木正文  
[NAVI編集長]

●栗野宏文  
[ユナイテッドアローズ  
マーケティングディレクター]



中野香織

[翻訳家・東京大学教養学部非常勤講師]

# 三者三様に模索しながら、 今「エレガンス」を何と訳すか。

11月号でお招きした『性とスーツ』の翻訳者、中野香織さんを再び囲んでの、  
「ジェントルマン」から「エレガンス」へと展開する、男をめぐるトークバトル！

**栗野** 今回は前回のジェントルマン論の続きという意味も含めて、「エレガンス」をテーマにしたいと思います。

**中野** 「ジェントルマン」は、最高の優雅（「エレガンス」）を自認する男でなければならぬと言っている人、では「エレガンス」とは何かと語源を調べてみただけですね。すると、マイニユーター（MINUTE）より些細な、よりつまらない、な美しさで人を喜ばせるものという説明があつて、ラテン語の語源では、好みにうるさい、基準が高くてなまじのことで満足しないことありました。日本語では「エレガンス」の類義語として、「洗練」と訳されている。「ソフィステイクション」という言葉も使われていますが、「洗練」というと、余計なものをほとんど排除して純粹なものにするというニュアンスがあります。でも実は「ソフィステイクション」はその逆で、悪いものをわざと混ぜて純粹でないものにする、ことなんです。

**栗野** エレガンスとソフィステイクションは、どちらが古い言葉ですか。

**中野** 古代ギリシャにはソフィスト論弁家と訳される人もいました。ソフィステイクションの方が古そうですが、今のようにならしたのは20世紀に入ってからです。  
**鈴木** 確かに僕らはソフィステイクションという、茶ごしやフィルターなどで無駄なものを排除して「洗練」されたものというふうに考えますね。でも、ソフィステイクテッド・レディというの

は、無駄なことをやって華やかさを際立たせている美しいご婦人という意味ですものね。

**中野** それで思ったのが、混ぜるものがバルガー（VULGAR）俗悪な、下品なものというのが興味深いな。

**栗野** それは面白いなあ。  
**中野** 日本語で「洗練」と訳したときと

ずいぶんイメージが違いますよね。雑誌「VOGUE」の編集長だったダイアナ・ブリーランドは、「美しさにはバルガリテイが欠かせない、エレガンスは拒絶である」と言っています。かっこいい言葉ですね。

**鈴木** たとえば、フェラーリはバルガーなんですよね。スポーツカーで美しいもの

のってバルガーなところが無いとダメなんです。イタリア的感受性の中では、バルガーは決して悪いことではないみたいですね。

**中野** 「タンデイ」の条件のひとつに、人を驚かせるというのがあつて、その奇抜さと独創性のバランスの取り方、バスカルの言うところの「交点」の取り方が上

手な人がエレガントだと言われます。

**鈴木** シンプルシティやモダンシティなどそのものの純粹性を維持するという、いわゆる純血主義的なもの考え方、ヒトラーまで行き着く近代的な排除の思想なんです。僕らは日本語で洗練とエレガンスをしばしば同義に考えがちですが、その意味合いは確かに違う。西洋人はさ

ておいて、日本人がその違いをどう思っているかということですよ。  
**中野** エレガンスって、言葉では表現しづらい、たとえば仕事や立ち居振舞いなど、現実の瞬間に消えてしまふはかないものにもかかわっています。実際、マイニユーターなことが人を支配してしまうこともあります。フランス文学者の山田登世子さんは「エレガンスはポテンツ（力）である」と、エレガンスは経済力以上に人を支配すると言っています。

**栗野** 日本の着物文化などでもそういう空気を持っていますね。たとえば、着物を着ている人の足の崩し方とか。

**鈴木** マイニユーターな身振りやバルガリテイ、微視的な差異と野卑さの結びつきの中に、エレガンスが浮かび上がってくるのでしょうか。

**中野** 均質な時空から際立つためには人にシヨックを与えることが必要で、そこにバルガリテイが力を発揮するんですね。  
**栗野** それは要するにロックンロールなんです。ロック・カルチャーだなあ。  
**中野** ブリーランドは、バルガリテイにはバイタリテイがあるからいいんだとも言っています。





栗野 それはクラスの中で育ってきた彼女自身のなかで価値の転換期を自覚したことでしょね。このままできつとブルジョワ文化が死ぬだろう、美の不文律を語っていくことでは継承できないだろうと感じて、時代の新しい息吹の要素、たとえばロックやハリウッド的なバルガーなものに美意識をブレイク・スルーさせている。「VOGUE」がパツド・テイストを意図的に入れているのもそういう背景があるからですね。

鈴木 西欧人はね、バルガーなものに対するコンプレックスが強いですよ。はすっぱなものとか、むやみにパワフルなものへのあこがれがある。宮廷には道化娼婦、そしてフリークが欠かせなかった。

中野 フランスでは「BCBG」という趣味の良さイコール階級のオリジンとなる考え方がありますが、あれはあくまで貴族社会のなかの趣味の良さを示しているもので、ランクの下の人がワンランク上を目指すことは、かえって上の人の趣味の良さを裏書きすることになります。そう考えると、日本人には趣味の良さのオリジンがないですね。趣味性をつきつめると、オタク世界のようなコミュニケーションの手段になってしまいます。

栗野 確かに世界で唯一オタク文化があるのはイギリスと日本だと思います。ヨーロッパの友人に言わせると、日本の文化は洗練されていると言いますね。

鈴木 それはソフィスティケーションということですか。

栗野 そうですね。彼らはどうしてそう言うかという、コム・デ・ギャルソンの服を見てそう言うわけです。つまり引き算していくものの潔さとかっこよさですね。他にも、建築とか和食器とか、彼らは「ZEN」って言うんですが、すごくソフィスティケートされていると言う僕は彼らがどうしてそう言うのか、理解するのに時間がかかりました。今でも本当のところは分かっていないかも時々思いますね。今のロンドンには、ロンドン・ミニマリズムとか、ゼン・モダンテ



前回に引き続きゲストは、東京大学教養学部非常勤講師の中野香織さん。栗野さんのリクエストで今回は「エレガンス」を考える。ユナイテッドアローズ原宿店3階にあるUAカフェで対談（座談）がスタートしたのが午前10時30分。それから、お昼を過ぎたので場所を近くのフレンチレストラン「オーバカナル」に移して午後2時過ぎまで白熱した。で、座談に入る前にコスプレ(?)撮影会。鈴木編集長は先月はやばやと(もちろんユナイテッドアローズで)購入した、イヴ・サンローラン・リヴゴージュのニットコート(¥80,000)。それを今回のテーマである「エレガンス」を意識したコーディネートを自前のシャツ、ストール、トラウザーズで、見事なスズキさん風の貴族趣味的な着こなしである。ちなみに、このニットコートはすでに完売とのこと。なお、手にお持ちのグローブ(¥16,000)もイヴ・サンローラン・リヴゴージュ。さて真ん中に挟まれた中野さん。今回はドリス・ヴァン・ノッテンのワンピース(¥73,000)に皮とビーズのネックレス(¥7,500)を。どちらかと言うとフォークロアな印象があるドリスだが、このワンピースはエレガントな部類に入る。栗野さんのスーツ(¥217,000)とタートルセーター(¥44,000)は、お気に入りのイヴ・サンローラン・リヴゴージュ。タキシードの洋装地、色はブラックのダブルブレストスーツ。往年のサンローランを想起させるエレガンスな一着。問い合わせ/ユナイテッドアローズ原宿店 03-3479-8180

イという流れがあつて、レストランやブティックなどにシンプルな内装が多い。それは80年代にコム・デ・ギャルソンを見たときの美意識の延長線上にあつて、80年代の後半にその揺り戻しもあつて、それがあまりに強かつたから、また、足して、いく流れも実際に出てきています。

鈴木 今は、テイストフル、趣味がいいというのと、ミニマリズムが同義なんですよ。

栗野 そうなんですよ。

鈴木 退屈なもの、単調なものがいい。なにかを重ねてきれいに見えるようにするには、知恵と才能と美意識的な修練が必要なので、それよりはたどろろはシル・サンダー的なものの方が容易かもしれない。ああいうミニマルなものは見た目にも簡単に趣味のよさがわかる。それがどうして趣味がいいことになるのかとなると、答えるのはむずかしいけれど、そう

いう美意識も飽きられると、またラセン的に18世紀に戻ることできるんです。だから、エレガンスの具体的な内容については固定化した定義はできないかもしれない。

中野 西洋には夜会服の文化があります。夜会にけばけばしい服を着るのが正しいとされてきた時代でも、若い人のエレガンスの訓練の場があつたんですね。それは、散歩服。なんです。パリのチュイルリ公園などで、朝食後にいちばんシンプルな散歩服を着て、自分のセンスをどう見せるか勝負する戦いの場があつたんですよ。19世紀のことですが、引き算して装った自分をどう見せるかというエレガンスの訓練の伝統があるわけですね。

の二乗、三乗しかできない。ミニマルの訓練もして、その両方があるのがベストなんですよ。そういう意味もあつて、今日は鈴木さんにイヴ・サンローランを着ていただいたんです。シンプルやミニマルとは違う空気を持った装飾性というものをもみんな忘れかけていて、それが僕には新鮮なんです。ミニマルなものにはそろそろ飽きてきていて、もう散歩の時間は終わったよ、と。

中野 同時代に出たデザイナーと比べても、イヴ・サンローランは装飾的ですね。

栗野 リフューザル(REFUSAL)拒絶)がエレガントを支えているんですよ。中野 日本の服飾事典でエレガントを調べると、女性に対する最高の誉め言葉で、シックより上とあります。フェミニンなイメージなんです。一方、イギリス人は優雅な男性を形容する言葉としてもよく使います。フランス人の言う「エレガ

ンな人」のイメージは、香りだけ残して立ち去っていく人という感じですね。

鈴木 たえばワインでエレガントという、しつかりしたボディだけ優しい、熟成しててなおかつ果実味がちゃんとある、バランスの優美なものを言うようですよ。ことによると物足りないかな、と思うぐらいの柔らかさがある。自動車でもエレガントという表現は使ってますよ。エンジンの回転が上がっても音が高まらない、いッギアを変速したのかわからない、ゴツゴツしないなど、クルマという機械性から脱出していうような、そんな乗り味のクルマはエレガントということになります。

栗野 そうやって洗練を突き詰めると、音もなく消え去る、さりげないことに向かうということは何となくわかります。

中野 論文でもエレガントな論文と評されるのは、技巧を感じさせず的確でシンプルな説明で書かれ、読む人の心にすつと落ちていくというもので、それが英語圏での最高の誉め言葉のひとつなんです。

栗野 お話を聞いてみると、実はエレガンスの実態はわからないというのが面白いですね。善意に解釈すれば、それほどさりげなくいいことであると言えます。でも僕はリフューザルにこだわりたいな。

鈴木 単純な機能主義とか、近代的な合理主義は、突き詰めればエレガンスの対極にありますね。

中野 エレガンスは距離感があつて美しく印象に残っていくものなんですよ。

栗野 その距離感の取り方が難しい。

中野 実体は記憶に残らないけど、印象だけが残るというか……

栗野 ファッションでは引き算することがかっこいいという潮流の中にあつて、役にたたなさそうなもの、過剰なものが一部の人の視線に触れているのかなと思います。シンプルだけど装飾性の高いものとして、サンローランの再評価もさえないと思います。エレガンスの結論は出ないと思いますが、エレガンスを見つめ直すにはいい時期だと思います。